



そもそも海苔はどのノリか

仲田 崇志

一般に、海苔と書くとノリと読みアマノリ類を指すが、これは江戸時代以降のことらしい(宮下 1970, p. 20)。『常陸国風土記』*1 (715 年頃成立) は海苔をノリと読んだ最初期の文献で、信太郡(霞ヶ浦南岸)の記述に「古老曰倭武天皇巡幸海邊行至乘濱浦之上多乾海苔俗云乃理由是名能理波麻之村」(古老によると、ヤマトタケル“天皇”が海辺を訪れたとき、乗浜の浜辺に多くの海苔いわゆるノリが干されていた。これに因んでノリハマの村と名付けられた)とある。ここで海苔はあえて和語の乃理に言い換えられているため、漢語の海苔として解釈すべきだろう。

中国では『呉都賦』[左思(太沖), 280 年頃成立]とその原注[劉逵(淵林)]に海苔が登場する。これらは詩文集『文選』[昭明太子(蕭統)選, 526-531 年間成立]*2 に収録された形で伝わっている。『呉都賦』では建業(現南京)に生える草の一種に「海苔之類」が挙げられ、原注で「海苔生海水中正青状如乱髮」(海苔は海水中に生え、緑色で乱れた髪カウタイの如し)と説明された。『大漢和辞典, 2 版』(諸橋 1989) は、これらを引いて「海苔」をアオノリとしている*3。

日本では『十七条憲法』(604 年成立) や『大宝令』(701 年成立) に『文選』の影響が見え(岡田 1954, p. 171, 東野 1977, p. 190, 水口 2022, p. 4), 『常陸国風土記』自体にも『文選』由来らしき語が複数見つかっている(小島 1977, pp. 612-614)。となれば、『常陸国風土記』の海苔もアオノリ類だったのかもしれない*4。

*1 『常陸国風土記』の本文は中村(2015, p. 101)より引用。

*2 『呉都賦』の本文・注は蕭・李(1977, p. 85)より引用。訳・解説などは中島(1977, pp. 263-267)も参照。

*3 諸橋(1989)は「海苔」の意味として他に側理紙(アオノリでできた紙; 仲田 2023 も参照)と(日本語としての)板海苔も示した。

*4 宮下(1970, pp. 5-6)は海苔が海藻類一般を指した可能性を示唆したが、漢語の可能性は検討していない。

引用文献

- 小島憲之 1977. 上代日本文学与中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察, 上, 3 版. 塙書房, 東京.
- 宮下章 1970. 海苔の歴史. 全国海苔問屋協同組合連合会, 東京.
- 水口幹記 2022. 律令官人と漢籍. 高田宗平(編)日本漢籍受容史：日本文化の基層. pp. 3-32. 八木書店, 東京.
- 諸橋轍次 1989. 大漢和辞典, 2 版, 6. 大修館書店, 東京.
- 仲田崇志 2023. アオミドロ語誌拾遺 (1): 陟厘の語源と意味. 藻類 71: 92.
- 中島千秋 1977. 新釈漢文大系, 79. 文選(賦篇)上. 明治書院, 東京.
- 中村啓信(監訳) 2015. 風土記上, 現代語訳付き. KADOKAWA, 東京.
- 岡田正之 1954. 日本漢文学史 増訂版. 吉川弘文館, 東京.
- 王象乾(刪訂)元禄 11. 評苑文選傍訓大全, 2. 大田權右衛門, 大坂; 辻勘重良, 京.
- 東野治之 1977. 正倉院文書と木簡の研究. 塙書房, 東京.
- 蕭統(編)・李善(注) 1977. 文選. 中華書局, 北京.

海苔生海水中正青状如亂髮乾之亦鹽藏有汁名曰濡
苔臨海出之

草則藿藟豆菴薑棗非一江離之屬海苔之類
繚食葛香茅石帆水松東風扶留布護臯澤蟬隣陵任

右、『呉都賦』より「海苔之類」(破線囲み)を含む箇所の抜粋(王 元禄 11, 卷 2, 11 丁裏)。左、「海苔之類」に対する劉逵の注(蕭・李 1977, p. 83)。